

林 芙美子
作家

戦前、戦後の文壇でめざましい活動をした女流作家の一人に林芙美子があります。彼女が杉並で新婚生活を始めたのは昭和元年の暮。その地は高円寺三丁目、今の住居表示では梅里一丁目十二番付近です。このころ西部電車の車庫（今の都バス車庫）の西側に宝来湯という風呂屋があり、その裏あたりの家の二階を借りたのです。しかし、この家での生活は四ヶ月ばかりで、堀ノ内一丁目三十六番に移りました。今の堀ノ内三丁目四十六〜五十四番付近で、福相寺北側辺にあり、敷地公園形式の敷地で「浅賀園」と呼ばれていました。この植込みの中に数軒の木造平屋が建って居り、その一軒を借りたのです。彼女の「清貧の書」にここでの生活が書かれています。

環境は大変良かったのですが、生活は赤貧洗うが如く、この生活体験がのちの「放浪記」を生み出したのです。安あがりの豆腐をよく買いに來たと、当時豆腐屋さんが話しています。着物姿で豆腐を買う姿を今でも記憶しているとのこと。どん底の貧乏生活もやがて終わろうとしていくころです。或る日、着替えないので水着姿で着物を洗濯しているとき、珍しく来客がありました。客は改造社編集部某氏でした。かくて改造社から新鋭文学叢書シリーズ「放浪記」が世に出ました。本は多くの人々に大きな反響を呼び、忽ち、ベストセラーになりました。彼女に取りついていた貧乏神は霧のように消え、以後姿を現しませんでした。

彼女は明治三十七年下関で生まれ、昭和二十六年新宿下落合で亡くなりました。小学校を転校すること十数回、職業も女給をはじめ、女中・売り子・下足番など転々。「花の命は短くて、苦しきことのみ多かりき」四十八歳の短い生涯でした。



福相寺北側元浅賀園
にあったお稲荷さん